

『ジョン・アスキュー神父様へ』

アウグスチヌス 高木 弘治

感謝とお別れの言葉

アスキュー神父様との出会いは、一九五三年で、約五十二年ほど前になります。御聖堂の建設中に、工事の進み具合を見学に訪れた時でした。アスキュー神父様は聖書を持ち、黙想しながら、こちらに歩んで来られました。「何か御用ですか」と尋ねられましたので、「私は主税町教会の信者です。出来ましたら、この教会に来たいと思っております」と申しました。アスキュー神父様は、優しい落ち着いた声で、「どうぞ、来てください」と言われ、私ごとき者を「主の聖堂」に招いていただきました。私は感謝と感激の心で喜びながら家に帰ったことを、今でもはつきりと覚えております。それから毎日曜日の御ミサにあずかり、松見栄三ご夫妻、吉田ご夫妻、金森ご夫妻と親しくご指導をいただきました。

五十一年前の一九五一年に、ア

スキュー神父様の司式で、結婚することが出来ました。私が今日あるのは、偏に「主の思し召しとアスキュー神父様のおかげ」と、毎日、感謝の日をおくっています。

一九九七年、引退されて、オーストラリアに帰国されましたが、二〇〇三年六月十三日、城北橋教会献堂五十周年記念の時には、お元氣なお顔を見せていただき、再会できた喜びと感謝を思い出します。何時も慎み深い眼差しで、愛情あふれる、お心の笑顔で、また優しいお声で、お導きいただきました。アスキュー神父様…。

八月十五日、聖母被昇天の日に天に召されました。アスキュー神父様の永遠の安息を、を慎み深くお祈りいたします。

感謝とお別れの言葉とさせていただきます。



『アスキュー神父様を偲んで』

ヤコブ 後藤 明憲

突然の訃報に動揺してしまった私は、受話器を耳に着けていたにもかかわらず、牧野管区長の声が遠くからしか聞こえてこなかった。浅野さんが、アスキュー神父を訪ねられた折の、お元氣な姿を拝見していただけに、俄かに信じられなかつたのである。暫くして、気持ちが悪く落ちていくと、アスキュー

神父の映像が一枚一枚切り取られて脳裏に甦ってきた。短パンに白いソックスで、腰高の自転車用颯爽と走っておられる姿、司祭室の椅子に軽く足を組んで、深々と腰を沈めておられる姿、ナプキンリングから外した真っ白な布を両腿の上に広げ、りんごを剥かれている朝食時の姿、説教をされる時の端正な姿、いずれもアレック・ギネスの演ずる物静かな典型的なイギリス紳士を彷彿させる神父であった。ジョン・フォードが描くアイルランド人はお人好しで、真っ直ぐな荒くれ男が多いが、そのイメージ通りのクワーク神父は一つ

歳下で、静と動、まさにお二人は生涯を、夫々の個性で日本での宣教に一生を捧げられた戦友同士であった。聖フランシスコが日本に福音を伝えた聖母被昇天の日にアスキュー神父が帰天され、またフランシスコの霊名を持つクワーク神父が葬儀ミサで追悼の説教をされたと伺っているが、遠い天国と、オーストラリアでは、私たちみこころ教会の信徒に賜ったご恩に対し、感謝の気持ちを伝えようがない。

私が困ったのは、クリリー神父の後にアスキュー神父が主任司祭になられた時であった。クリリー神父は私たちを信頼され、信徒の意見によく耳を傾け、教会行事などは自由に任せてくださったが、アスキュー神父は、主任司祭としての教導権は当然として、全ての事に目配りをされる責任感の強い方であったため、今までのギャップに相当戸惑ったのである。そこで主任司祭が変わっても混乱が起きないように、小教区の組織、規約をつくれという指示を受けたのである。各教会の規約を取り寄せ、勉強したが、信徒会の組織や規約